

都市近郊に位置する管理形態の異なる草地の植物相

北総生き物研究会 金子是久

千葉県白井市付近は、かつて印西牧とよばれ、半自然草原が形成されていたが、近年、農地・都市化の進行で大きく縮小した。本研究では、白井市内の草地における植物相および植生調査を行い、半自然草原が回復するための維持管理方法について検討した。

白井市内の草地(49箇所)は、6つのハビタット(放棄水田、法面、刈り取り地、造成地、管理放棄地、耕地・運動場)に区分した。各ハビタットの植物相については、草原性植物(絶滅危惧種を含む)は、刈り取り地で最も多く、耕地・運動場で最も少なく、外来植物は、放棄水田、法面の大部分および造成地で多かった。

一方、刈り取り地は、様々な頻度で刈り取られ、植生にも違いがみられた。このことから、刈り取り回数と植生との関係を調べた結果、草原性植物の種数は、年1回、2回の刈り取りで多く、年4回以上では極端に少なかった。また、各属性区分種(草原性植物・人里植物・外来植物)の種数、植物量の比率は、年0回(約2年に1回の刈り取り)~2回では草原性植物、年4回以上では人里植物および外来植物が高かった。

今後の維持管理方法としては、年1~2回、多くて年3回の刈り取りを経年で行い、ススキ型、チガヤ型の草原性植物を多く生育させ、生物多様性だけでなく、かつての牧・茅場の面影が残る歴史・文化的景観の保全を進めることを提案する。